

やら 12	ゆえ 8	よって 4	よね 4
より(る) 4	わけ 8~12	わね 4 or 5	わよ 12

以上が33~37ページに掲げた諸音節語(必ずしも国文法で規定される純粹な助詞ばかりでは語ではない語も多分に含まれている)である。






そこで、更に「佐竹式速記・学習コースI」の助詞符号理論に合わせ、これと同一的形式を踏襲させて頂き、誠に失礼な進め方ではあるがこれに準拠して部分的に諸符号を拝借させて頂き助詞音節語の間口を拡大してみたい。

1. 普通助詞、特殊助詞、複合助詞等

※「佐竹式速記・学習コースI」の (112~119ページ)

かしら 12	からこそ 12	からさ 12	からして 12
からで 12	からでは 12	からと 12	からな 12
からね 12	からの 12	からは 12	からも 12

けど" けども⁸ けれど" ^{8~12} けれども してから^{4 12}





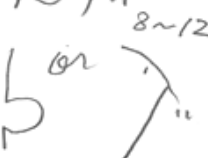
してて してね しての しては¹² すら^{8~12}



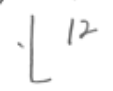
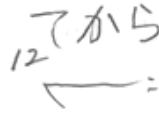
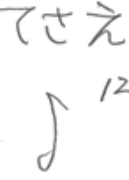
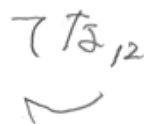
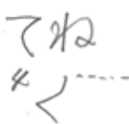
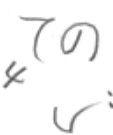







すらの^{8~12} すらも^{8~12} だけけど" ¹² だけども^{4~8} だけれど"^{8~12}






だに¹² てから¹² てさえ" ¹² てな¹² てね⁴ ての⁴

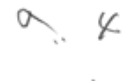

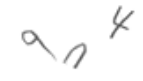


として⁴ としての⁴ としては^{4~12} としても⁴



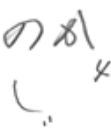
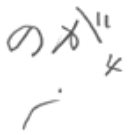
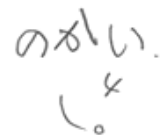
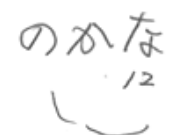

とて⁴ とては^{4 8} とっても⁴ とても⁴ とは⁴

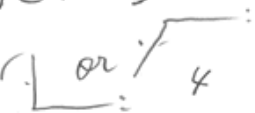
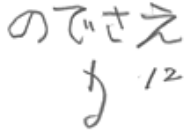
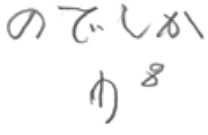
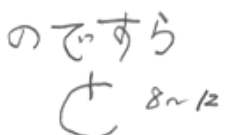
にして⁴ にしては⁴ にしても⁴ にて⁴ にての⁴

にては⁸ にても⁴ のが⁴ のが⁴ のがい⁴ のかな¹²

のだから のでさえ¹² のでしか⁸ のですら^{8~12}

のでね(え) のでは のでも × は"か³⁹し
 × + or + と わ or ---A 12
 or ---ナ or ---E

はかり は"かりでは は"かし は"かり
 12 12 12 12
 or or or

まで までして まででは までに₄ までね₄
 4 4 8 4 4
 or or or or

までの まででは まででも らは"12 れは"12
 4 or 4 or or
 or or or or

2. 助詞に連用する慣用語

※ 「佐竹式速記・学習コース I」の
 (119~122ページ)

○ 「と」への連用

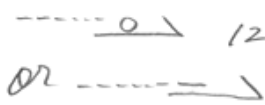
ということ ということに といふもの といふより⁸ ×
 8 8 or 8 8 8
 といえども⁸

と言った と言つて と言つてみても^{4~8}
 4 or 8 4 4 or 8

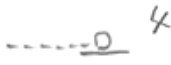
。「に」への連用

<p>において</p> <p>-----p x</p>	<p>においては</p> <p>-----p or -----p 12</p>	<p>におきまして</p> <p>-----p 8~12</p>
<p>における</p> <p>-----p 4~8</p>	<p>にかかわらず</p> <p>-----v x</p>	<p>に限った</p> <p>-----o 12</p>
<p>に限って</p> <p>-----o 12 -----x</p>	<p>に限らず</p> <p>-----v x</p>	<p>に関して</p> <p>-----\ 4 -----o 8</p>
<p>に關せず</p> <p>-----o v x</p>	<p>にぞくし</p> <p>-----p x</p>	<p>にぞくした</p> <p>-----p 4</p>
<p>にぞくして</p> <p>-----p x</p>	<p>にぞくしまして</p> <p>-----p x -----p 8~12</p>	<p>にぞくする</p> <p>-----p 8~12</p>
<p>に対し</p> <p>-----p 4 -----o</p>	<p>に対して</p> <p>-----p x -----o</p>	<p>に対しまして</p> <p>-----p or -----p 8~12</p>
<p>に対する</p> <p>-----o or -----o 8</p>	<p>について</p> <p>-----p x</p>	<p>についての</p> <p>-----p x</p>
<p>については</p> <p>-----p 4~8 -----o</p>	<p>につき</p> <p>-----e</p>	<p>につけ</p> <p>-----b or -----o 16 -----o</p>
<p>に向かう</p> <p>-----o 16~20</p>	<p>に向いて</p> <p>-----p 8~12 -----o or -----o 12</p>	

に向かって



に向き



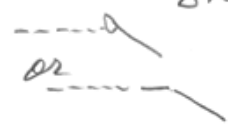
に向く



に向け

4/

8~12



にもかかわらず

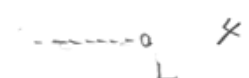


にもかかわりませす"

12



にもとづき



にもとづいた



にもとづいて



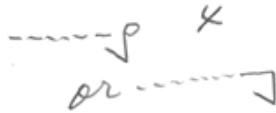
にもとづき



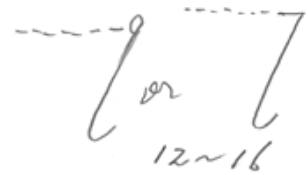
にもとづけ



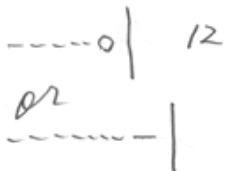
にとって



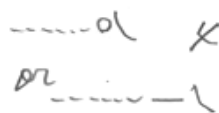
にとり



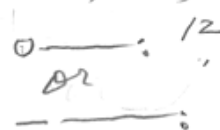
---によった



---によつて



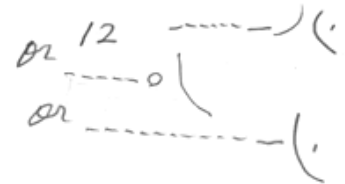
によります



によれば"



によりますれば"



。「もの」への連用

もの ⁴ ----- Y	ものが ¹² ----- └	ものが ¹² ----- └	もので ⁴ ----- Y	ものでは ⁸ ----- Y
-------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	--------------------------------	---------------------------------

ものとなって ----- Y or Y	ものとなる ----- Y or Y	ものに ⁴ ----- or └	ものの ⁴ ----- Y
---------------------------------	--------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------

ものは ----- or Y	ものも ⁴ ----- Y	ものや ¹² ----- Y	ものを ----- Y	ものよ ----- Y
-------------------------	--------------------------------	---------------------------------	-------------------	-------------------

もとに ----- or or	もとの ^{8~8} ----- or or
--------------------------	---

。「その他」への連用

-----を言い ----- or	-----きもち ----- or	-----きもって ----- or
かもしれない ----- or	かもしれぬ ----- or	かもしれません ----- or
(or)	(or)	(or)

助動詞

「佐竹式速記・学習コースⅠ」の第5章には膨大な量の助動詞音節が、満載され登載されている。ページ数(紙数)にすると143~167ページにも及んでいる。

国文法で規定される助動詞は多種多様をきわめ、その利用範囲や活用範囲は実に際限がないと言っても過言ではあるまい。

「佐竹式速記・学習コースⅠ」を学べば学ぶ程「本助動詞理論」は、理詰めで整然たる解説が懇切丁寧に施されており、また実に詳細であり理解し易い。

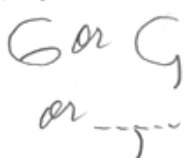
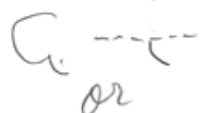

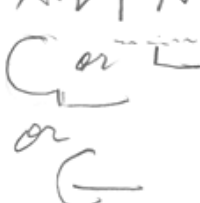
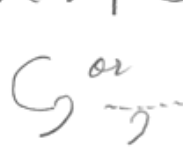
本書の佐竹康平先生のこの偉大なる「助動詞理論」について、私は単純な安易な考え方を鵜呑みにしたり、あるいは掠め取ったりなどして単に模倣や写し書きで進めてゆくなどの軽率にして希薄な考えは毫も持ち合わせていない。併し乍らそれならばこそ「佐竹式速記・学習コースⅠ」の佐竹康平先生の金科玉条たる「助動詞理論」の実際を応用させていただき更にその系統性を尊重且つ踏襲させて頂き、例符号の序列の整頓等の他は、妄りに着手せず飽く迄も「助動詞理論」の原形温存の精神を旨に本書を準拠させて頂きたいものと切に願うものである。



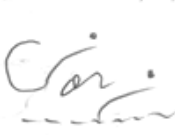

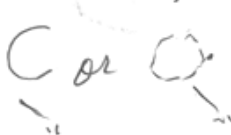
1. スルの活用 (佐竹式速記 ≈ 143 ~ 144 ページ)

スル スルアリ スルカ スルガ スルサエ
8~12







スルシ スルテ⁽ⁿ⁾ スルト スルトカ スルトモ






スルナ スルナヲ⁽ⁿ⁾ スルナガ スルナテ⁽ⁿ⁾ スルマテ⁽ⁿ⁾







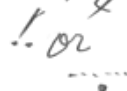
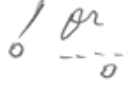



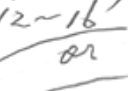

スルヨリ スルドモ スルバ スルンテ⁽ⁿ⁾ ...スル


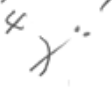






*この小円は弾丸

2. スルの変化 (佐竹式速記 ≈ 144 ~ 145 ページ)

シ シタ シタイ シマイ シマウ ス ショウ スマイ
4 4 4 8 8 12~16









3. ナイの活用 (佐竹式速記 ≈ 145 ~ 146 ページ)

シナイ シナッタ シナク シナクッタ シマイ ナイ
4 4 4 4 4







ナカッタ¹² ナカラン¹² ナカリシ¹² ナカレ¹² ナキ¹² ナク¹²

ナクソウ¹² ナクナッタ¹² ナゲナ¹² ナゲニ¹² ナケレバ^{20<}

ナケレバナラナイ¹² ナサソウ¹² ナシ¹² ---マイ¹²

4. セルの活用 (佐竹式速記 ≈ 146 ~ 147 ページ)

セ¹⁶ セナイ¹⁶ セナカタ¹⁶ セナク¹⁶ セヌ¹⁶ セバ¹⁶

セマイ¹⁶ セヨ¹⁶ セリ¹⁶ セル¹⁶ セン¹⁶

5. セズの活用 (佐竹式速記 ≈ 147 ページ)

セザラバ¹² セザラン¹² セザリキ¹² セザリシ¹² セザル¹²

セザルト セザルトモ セザルハ セザルモ
 } or } or } or } or }

セザレ セザレド セザレドモ セザレバ セジ
 } or } or } or } or }

セズ セズト セズトモ セズバ セズンバ
 ---V ---V or V --- or V --- V or V

6. ズの活用 (佐竹式速記 ≈ 147 ~ 149 ページ)

* 小円は弾み円









ざらは ざらん ざりき ざりし ざる ざると ざるとも
 (or) } or } or } or } or }





ざるは ざるも ざれ ざれと ざれども ざれば
 } or } or } or }







ず ずとも ずんば * 小円は弾み円
 V V } or V

* 佐竹式速記 ≈ 148 ページの最下行より 4 行目と、次の上段に 2 行にわたり 12 助動詞の例符号が掲載され 挟まれていて、その真上の行より 9 行目からは

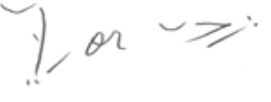
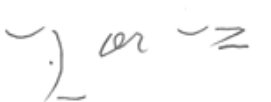


否定の「ズ」、接円の「ズ」を使う単際の記号書法が述べられている。これらの書法は丸子式速記方式とは全く無関係なるが、丸子式の「ズ」「ザル」等についてまた、149ページの上の行より3行目（この中のズ行は例符号である）についても同様に、こゝも単に丸子式速記符号を以て書き置くに留めておく。

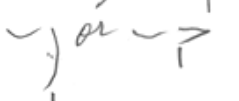
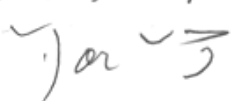

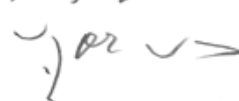
えざる たざる ばざる まざる らざる わざる えず たず











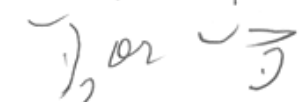

はず ます らず わず





さざる さざるは さざれば さず さずとも さずんは







7. アラズの活用 (佐竹式速記 ≈ 149 ページ) *小円は弾み円

アラザラン アラザリキ アラザリシ アラザル





アラザルト アラザルトモ アラザルモ アラザレ





アラザレド アラザレバ アラザレドモ アラス





アラストモ アラスバ アラスモ アラスンバ
 ヴ ヴ ヴ ヴ

※ 小円は弾み円

※ これ等の「アラス」の活用は「カラス」「ナラス」等の活用としても使えるとの解説もあることを付言しておく。

8. デスの活用 (佐竹式速記 ≈ 149 ~ 150 ページ)

デシタ デシテ デショウ デス

 ヴ ヴ ヴ

ノデシタ ノデシテ ノデショウ ノデス

 ヴ ヴ ヴ

※ (佐竹式速記 ≈ 149 ~ 150 ページには、上記の 8 例符号の説明と、これらに「-----ネ」と「-----ネエ」などの應助詞が続く場合の符号対換について述べられている。丸子式では、単に「ね」と「え」の基礎符号だけの順記で解決できる。

デシタネ デシテネ デショウネ デスネ

 ヴ ヴ ヴ

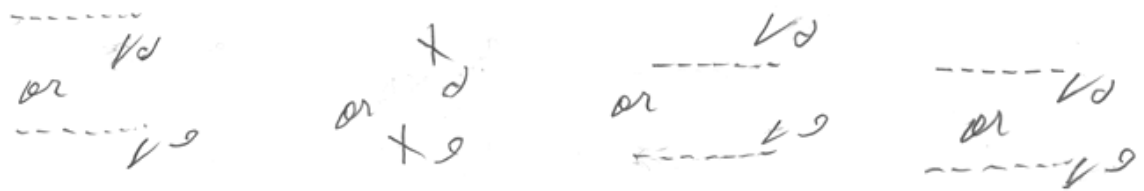
ノデシタネ ノデシテネ ノデショウネ ノデスネ



デシタネエ デシテネエ デショウネエ デスネエ



ノデシタネエ ノデシテネエ ノデショウネエ ノデスネエ



※ (佐竹式速記 ≈ 150ページ) の下より8行の符号解説は丸子式には該当しないので略す。

9. マスの活用 (佐竹式速記 ≈ 151 ~ 157ページ)

マシタ マシテ マショウ マス マセン
※ (キュー)と同形 ※ (ケ)の書き流し

① 助詞が読いたとき (佐竹式速記 ≈ 151 ~ 152ページ)

マシタカ マシタカ マシタカラ マシタテ マシテカ
マショウカ マショウカ マスカ マスカ マスエハ

マスノデ マセンカ マセンガ マセント マセンノデ [←]

—| /| /| /| /|

③ 二行が連続したとき (佐竹式速記 ≈ 152ページ)

マシタラ マシタラバ マシタリ マシタル マシタルレバ

 / / / / /

)))))

マシル マシルカ マシルガ マシルカラ マシルナラバ

—) —) —) —) —)

)))))

マシルノデ マシルハ マシルレバ マスレバ

—) —) —) —)

))))

④ 接続詞の「モ」「ケレドモ」を付けるもの

(佐竹式速記 ≈ 152ページ)

※この項目の④は、単に「モ」「ケレドモ」には符号の末尾に円を付けて捲ねるという書法説明に過ぎない。丸子式には該当しない。丸子式で例符号とする

マシタケレドモ マシタルケレドモ マシテモ マシウケレドモ

 / / —) —)

))))

))))

※ 丸子式では「モ」「ケレドモ」は) であり同形。

マスケレドモ マシルケレドモ マセンケレドモ

—) —) /)

)))


④ エ列省略を応用するもの (佐竹式速記 ≈ 153 ページ)

マスレド マセド マセナンダ マセネド マセネドモ

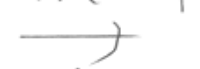
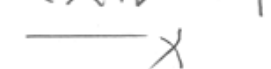
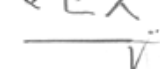







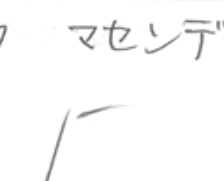
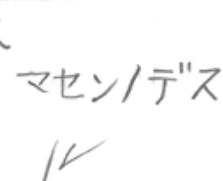

マセネバ マセバ マセントモ

⑤ 否定が続いたとき (佐竹式速記 ≈ 153 ページ)

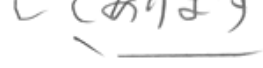

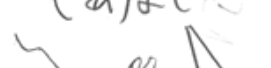
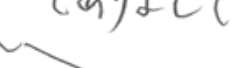
マスマイ マスルマイ マセス




⑥ 「マセン」に「デス」の活用 (佐竹式速記 ≈ 153~154 ページ)

マセンデシ マセンデシテ マセンデショウ マセンデス マセン/デス






⑦ 「アリマス」 (佐竹式速記 ≈ 154~155 ページ)

が[・]ありまして が[・]ありましょ が[・]あります が[・]ありません

してあります してありません でした[・] でした[・]して





デ"アリマショウ デ"アリマス デ"アリマセン デ"ハアリマスカ⁽¹¹⁾

デ"ハアリマセン ニ"アリマシテ ニ"アリマス ノ"アリマシタ

*この部分は ズラシ書き

ノ"アリマセン ハ"アリマショウ ハ"アリマス

モ"アリマシタ モ"アリマシテ モ"アリマス

(H) 「ノ"デ"アリマス」 (佐竹式速記 ≈ 155 ~ 156 ノーシ)

シ"タイノ"デ"アリマショウ シ"タイノ"デ"アリマセン シ"タイノ"デ"アリマシタ

シ"タイノ"デ"アリマセン タイノ"デ"アリマス タイノ"デ"アリマセン

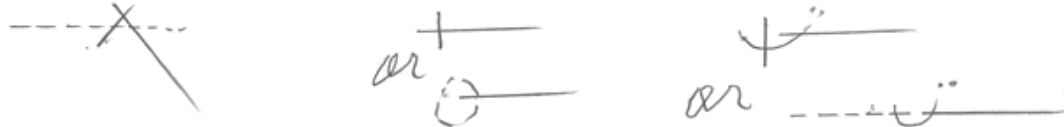
タ/デアリマシタ タ/デアリマシテ タ/デアリマシヨウ



タ/デアリマス タ/デアリマセン ナイ/デアリマス

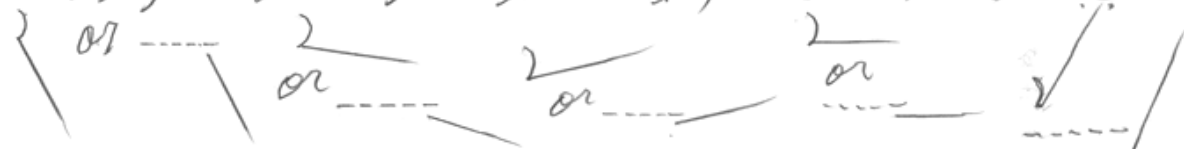


ナカ、タ/デアリマシタ /デアリマス /デアアル/デアリマス



① 「シマス」 (佐竹式速記 ≈ 156 ~ 157 ページ)

シマシタ シマシテ シマシヨウ シマス シマセン



※ ①には「シマス」の例文符号が記載されている。同一例文符号を丸子式で示す。

禁じます 修繕しました 推薦します 説明します



① 「おります」 (佐竹式速記 ≈ 157ページ)

オリマシタ オリマシテ オリマシヨウ オリマス オリマセン

オルデアリマシタ オリデアリマシテ オリデアリマシヨウ

オルデアリマス オリデアリマセン

② 「ナリマス」 (佐竹式速記 ≈ 157ページ)

ナリマス ナリマセン ナルデアリマス ナルデアリマセン

ニナリマス ニナリマセン ニナルデアリマス ニナルデアリマセン

10. 「ゴザイル」の活用 (佐竹式速記 ≈ 158~159ページ)

ガゴザイマス ゴザイ コザイマシタ コザイマシテ ゴザイマシヨウ

ゴザイマス ゴザイマセン ゴザッタ ゴザッテ ゴザラ ゴザラス

Handwritten symbols for ゴザイマス, ゴザイマセン, ゴザッタ, ゴザッテ, ゴザラ, ゴザラス.

※ 「過去形」は下段に位置付ける。

ゴザラバ ゴザレバ ゴザリ ゴザル デゴサイ デゴザイマス

Handwritten symbols for ゴザラバ, ゴザレバ, ゴザリ, ゴザル, デゴサイ, デゴザイマス.

デゴザッテ デゴザラ デゴザリ デゴザル ノゴザイマス

Handwritten symbols for デゴザッテ, デゴザラ, デゴザリ, デゴザル, ノゴザイマス.

ノデゴサイ ノデゴザイマス ノデゴザラ ノデゴザリ ノデゴザル

Handwritten symbols for ノデゴサイ, ノデゴザイマス, ノデゴザラ, ノデゴザリ, ノデゴザル.

ニゴザイマス ノゴザイマス ハゴザイマス モゴザイマス

Handwritten symbols for ニゴザイマス, ノゴザイマス, ハゴザイマス, モゴザイマス.

※ この部分はズラシ書き

II. 「ラレ」の活用 (佐竹式速記 ≈ 15P ~ 16P ページ)

※ ここには 受身助動詞「ラレ」「サレ」、使役助動詞「シメ」「サセ」が説かれている。この基本の4助動詞は「ラレ」の活用の基本と意義づけられている。併し、丸子式とは元来、符号形は異なる。以上に倣い、15P ~ 16P ページまでの符号を丸子式で示す。

サレ 12 ラレ 12 サセ 8 シメ 4
Handwritten symbols for サレ, ラレ, サセ, シメ.

ラレサルハ ラレサレドモ ラレサレバ ラレズ" ラレズトモ

Handwritten musical notation for the first row, including notes and rests. A dashed circle highlights a section with annotations:

- *ラレズ" (Lalezu)
- *ラレズトモ (Lalezu to mo)
- *サレズ (Sarezu)
- *サレズトモ (Sarezu to mo)
- *※(参考) (Reference)

ラレズバ ラレタ ラレテ ラレバ" ラレバ" ラレバ" ラレバ" デ"

Handwritten musical notation for the second row, showing notes and rests.

ラレバ" デ" アル ラレバ" ハ ラレバ" ン" デ" ラレバ"

Handwritten musical notation for the third row, including notes and rests.

Handwritten musical notation for the fourth row, including notes and rests. A note is annotated with:

- *この小円は 弾み円 (This small circle is a bounce circle)

サルル サルル" デ" サルル" デ" サルル" / デ" アル サルル" ハ サルル" バ"

Handwritten musical notation for the fifth row, showing notes and rests.

ササ ササシタ ササシテ ササス ササズ" ササセ ササセズ"

Handwritten musical notation for the sixth row, including notes and rests.

ササセル ササツウ ササレ サシ サシタ サシテ サス

Handwritten musical notation for the seventh row, including notes and rests.

サセラル サセラレ シメラレ シメラル

12. 「ナケレバ」の変化活用 (佐竹式速記 ≈ 162~167₂₀₋₂₃)

ナキ₁₂ ナケ₁₂ ナケレバ_{8~12} ナケリ_{16~20} ニ₁₂ ネバ₄

ナケレバ₁₂イカ_!ナイ ナケレバ_{8~12}イカ_!ナ_!ク_!ッタ ナケレバ₁₂イカ_!ン

ナケレバ₁₂イケ_!ズ ナケレバ_{8~12}イケ_!ナイ ナケレバ₁₂イケ_!ナイ_!デ_!アリ_!マス

ナケレバ₁₂イケ_!ナ_!ク_!ッタ ナケレバ_{8~12}イケ_!ナ_!ク_!ナ_!ッタ ナケレバ₁₂イケ_!ネ_!エ

ナケレバ₁₂イケ_!マイ ナケレバ_{8~12}イケ_!マス_!マイ ナケレバ₁₂イケ_!マ_!セン

ナケレバ₁₂イケ_!メ_!エ ナケレバ_{8~12}イケ_!ケン ナケレバ₁₂ナ_!ラ_!ズ

ナケレバ₁₂ナ_!ラ_!ナイ ナケレバ_{8~12}ナ_!ラ_!ナ_!ク_!ッタ ナケレバ₁₂ナ_!ラ_!ナ_!ク_!ナ_!リ

ナケレバナラヌ ナケレバナラヌノデ ナケレバナラヌノデアル

Handwritten symbols and annotations for the first row, including a large 'X' and various lines.

ナケレバナラネエ ナケレバナリマス マイ ナケレバナリマセン

Handwritten symbols and annotations for the second row, including a bracket labeled '16~20' and another labeled '24~'.

ナケレバナナルマイ ナケレバナンネエ

Handwritten symbols and annotations for the third row.

13. 「その他」(佐竹式速記 ≈ 167~169 ページ)

※ ここには、「……あと、こまかい活用が少し残っているのので、まじめで掲げておくことにする。既述のものとは重複するものもあるが(あえて)整理する意味で掲げておく」との説明がある。

掲げられている符号を丸子式で示す。(序列はアイウエ 順)

アリタキ アリタク アリタシ ---カゴトキ ケリ ケル ケルハ

Handwritten symbols and annotations for the fourth row, including various lines and a bracket labeled '8~12'.

ケレ ケレバ ゴトキ ゴトク ゴトシ サルヲエサル

Handwritten symbols and annotations for the fifth row, including various lines and a bracket labeled 'or'.

サルヲエズ サルヲエナイ サルヲエナカタ シイ シキ

Handwritten symbols and annotations for the sixth row, including various lines and a bracket labeled 'or'.

シク スハキ セサルベカラス" セサルヲエズ" セサルヲエナカ^ルタ

ルタ'."/>

セサルヲエナイ タダ^ルロウ タ^ッタ タ^ッタロウ タ^ッテ タラサル

タラサルハ タラザルベカラス" タラザレバ" タラス" タラスンバ

* この小用は^弾必用

タラバ タラン タリ タリシ タルハ タレバ" ----- タ^ッロウ

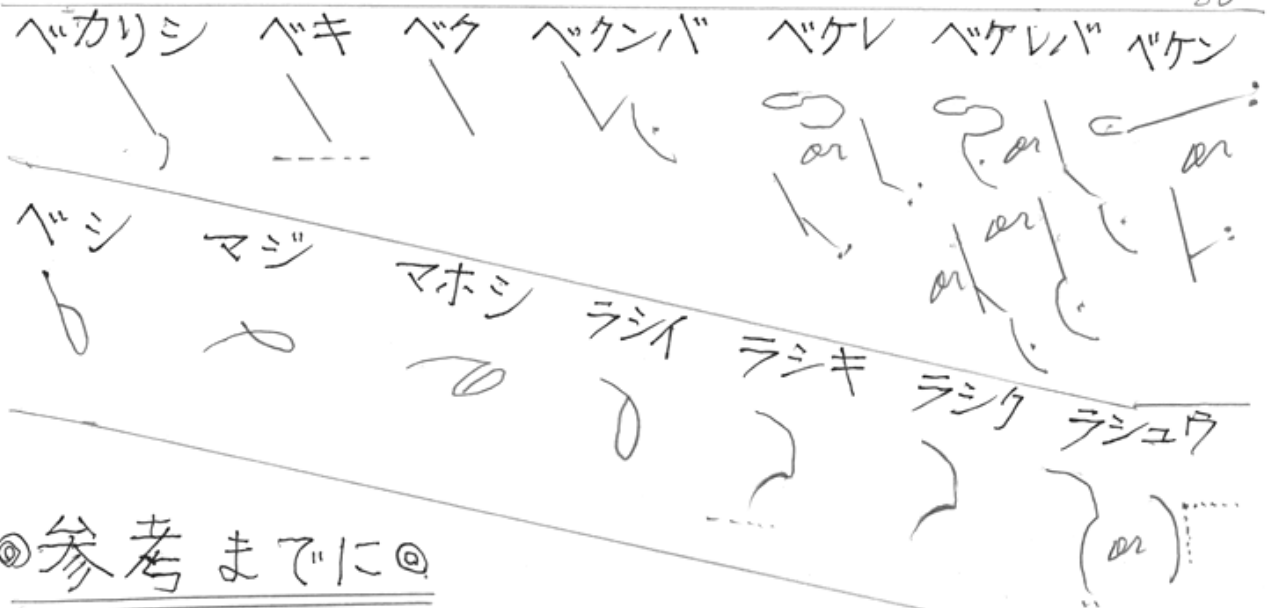
ッロウ'."/>

ニオケルカゴトキ ニオケルゴトキ ニオケルゴトク

{=オケル} の書法も可とする

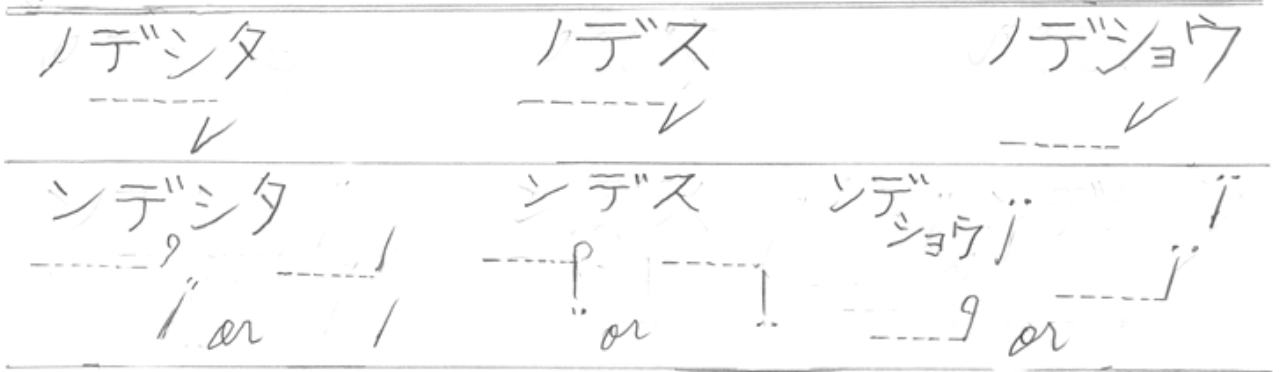
ニオケルゴトシ ----- ノゴトキ ----- ノゴトク ----- ノゴトシ

ノダ^ッタロウ ノダ^ッロウ/ ベカラサル ベカラザレバ" ベカラス"



◎参考までに◎

※ここに掲げた丸子式符号の36ページの最上段に、
 接続助詞である「ので」の符号がある。これは国語辞典(現代
 国語辞典・三省堂)によると「客観的に理由・原因をあらわす」とある。この「ので」に代わり「んで」という接続助詞がある。
 日常、結構多くの人が口にして、舌尖先端を2度連続して硬口蓋
 を打つ動作の省略であるが、「んで」が多発され多い。高速発語
 傾向にあるこんにちの音便化のひとつのあらわれであろう。「音便」とは「単語
 の音の一部が発音し易いように変わる」……(現代国語辞より)とある。併し
 論べての世人に当て嵌まるというものではない。
 丸子式速記符号の48ページ～56ページにかけて「ので」「のでー」
 が散見される。また「んで」「んでー」は特別には採り上げてはない。
 併しこれらは国文法上、助動詞ではなく、あく迄も助詞形態を残し、助
 詞的助動詞的に、しかも慣習的に且、無意的に発語されているとも
 言える。丸子式符号では「ので」の符号は設えてあても「んで」の符
 号については基礎符号順記以外のものはない。そこでこの接続助詞と助
 動詞が連動され音便化されている符号の諸例を掲げる。



ノダッダ 12 /	ンダ /	ノダロウ /
ンダッダ / or /	ンダ / or /	ンダロウ / or /
ノデアッダ /	ノデアイル / or /	ノデアロウ /
ンデアッダ / or /	ンデアイル / or /	ンデアロウ / or /

位置で示す「過去・現在・未来」について

※ 60～61ページに掲げた各3態の符号については左端が過去をあらわし、中間が現在をあらわし、右端が未来をあらわしている。符号の搬移列上であらわすと過去形が下、現在形が中、そして未来形が上と決定づける。助動詞類、動詞類についてはこの考え方を基本として妄りに煩雑に至らない限度内に於いて幾つかのこの3態符号を持定しておくことも便利で良策であろう。

再度「ンデス」の登場 -----! or -----!

※ 60ページの最下位段の「現在」の欄に「ンデス」の符号がある。これについて幾つかの「動詞+ンデス」を掲げる。

「動詞 + ンデス」の諸符号例

アソアンデス	アテルンデス	アマレンデス	アユムンデス

イタルンデス	イルンデス	ラエルンデス	ウケルンデス

ウツルンデス	ウテルンデス	ウネルンデス	ウマレルンデス

オイルンデス	オクンデス	オトスンデス	カケルンデス

カセルンデス	カタルンデス	カテルンデス	キタンデス

キテルンデス	クエルンデス	クサルンデス	クヤムンデス

クイルンデス	ケスンデス	クムインデス	コナインデス

コバムンデス	サガスンデス	サトルンデス	シカルンデス

シタンデス	シムンデス	ステルンデス	スネルンデス	スムンデス

セクンデス セメルンデス ソゲンデス ソメルンデス タケルンデス
 ! ! ! or ! ! ! ! !

ダスンデス タテルンデス タバネルンデス タベルンデス タメルンデス
 O ! ! or ! ! or ! ! ! ! ! or ! !

チルンデス ツタワルンデス ツムンデス デキルンデス デメルンデス
 ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! !

トブンデス ドメルンデス ナクンデス ナヤムンデス ニオウンデス
 ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! !

ニクムンデス ニコムンデス ニテルンデス 又ウンデス 又ケルンデス
 ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! !

ネカスンデス ネタムンデス ノクルンデス ノセルンデス ノベルンデス
 ! or ! ! ! ! or ! ! or ! ! or ! !

ノボセルンデス ノムンデス ハネルンデス ハマルンデス ハヤルンデス
 ! or ! ! ! ! or ! ! or ! ! or ! !

ヒカルンデス フクンデス フムンデス ホコルンデス ホスンデス
 ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! !

ホメルンデス マスンデス マテヌンデス マナスンデス マネルンデス
 ! or ! ! or ! ! or ! ! or ! !

マモルンデス	ミセルンデス	ミレルンデス	ムカランデス	ムケルンデス ⁶⁶
メデルンデス	メモルンデス	モウカランデス	モツンデス	
モテナインデス	モメルンデス	モユルンデス	モセルンデス	
ユクンデス	ユクミルンデス	ヨブンデス	ヨムンデス	

助動詞総集

※現代国語辞典(三省堂)の127~128ページの助動詞活用表をもとに助動詞の種類と、その「語」の符号例を掲げる

(A) 口語助動詞

(使役助動詞)

せる させる

(受け身助動詞)

れる られる

(可能・自発助動詞)

れる られる

(尊敬助動詞)

れる られる

(打ち消し助動詞)

ない, ぬん

(意志・推量助動詞)

やう

 ※ 才段長音が主に該当する

(希望助動詞)

たい たがる

(丁寧助動詞)

ます

(過去助動詞) (様態助動詞) (伝聞助動詞)

た

そうだ

そうだ

---|

---|

---|

(打ち消しの意志・推量助動詞) (推定助動詞)

まい

-----) _{4~8}

らしい

-----) ¹²

(推定・たとえ助動詞) (断定助動詞)

ようだ

|

だ

---|

です

/ &

(B) 文語助動詞

(使役助動詞) (受け身・可能・自発) (尊敬助動詞)

す さす しむ

る らる

る らる す さす しむ

() ---) ---)

() ---) ---)

() ---) ---) () ---)

(打ち消し助動詞) (意志・推量助動詞)

ず

むん むずんず らむ ^{らん} けむ ^{けん} べし まし めり

v

ん / らん らん らん らん らん らん らん らん

(希望助動詞) (過去助動詞) (完了助動詞) (伝聞助動詞)

たし まほし

きけり

つぬ たりり

なり

---) ---) ---)

---) ---) ---)

---) ---) ---) ---) ---)

---) ---) ---)

(打ち消し意志・推量) (推定) (推定・たとえ助動詞) (断定助動詞)

まい

じ

sl

ごとし

ごとく

なり

なり

たり

---) ---) ---)

---) ---) ---)

---) ---) ---) ---) ---)

---) ---) ---) ---) ---)

音、音節、成語等の繰り返し(重音省略法)

※ 丸子式速記の諸符号をいろいろな項目(形式)を設けて掲げてはいるが、項目を束ね、説明するための「定義語」については私は、特別な用語を特別に労作して、敢えて考案したりして、その定義付けを新設し、その上、厳格に押しつけようなどという気持は毫も持ち合わせてはいない。速記先達が学ばれたプロセスに於ける用語(定義語)は、やはり押し並べて同一のものであることが正鵠だと考えている。

変化を生じているのは、方式毎によって生み出されている、方式毎によって異なるバラエティーに富んだ符号そのものだけである。敢えて勇断を以て諾らせて頂くとするならば、速記教本に登載されている「定義語」は、速記先達諸氏の長年月を費やして血の滲むお如き努力を以て積み重ねられ、苦渋の結果考案され、創作された定義語……それは珠玉であり、永遠のものであり、速記後輩人たちは、礼を低くして、これを使用させて頂くべきものと思っている。「拝借」とか「借用」とか「無断使用」とか、果ては「盗作」とか、遠慮しながら、恥辱の念を持ち、小心翼翼として、これを使用するなどという狭隘な非学問的な考えは、決して持つべきではあるまい。

今後の速記学問と速記道と速記界の発展を旨とする理念こそ、この狭隘の考えからの脱皮である。

※ 「左竹式速記・学習コースⅠ」の44ページ～46ページ、また「中根式の研究・吉川欽=(随)……(昭和61年8月1日)」の14ページには「重音」についての速記符号書法が詳細に記されている。私は遠慮なく正々堂々と、この定義語を使用させて頂くことにする。

1. 1重音の場合

1つの同じ音が、2度連続された場合、第1音の末尾部分に点の加点を施す。点は第1音に付着(なるべく右下側)していても可、または、のびりぐらいならば、離れていても可とする。また、2度連続された後の音は、本来、加点されるべき箇所から、その位置から流けて書いてゆくものと定める。

カカシ	ススキ	タタミ	ナナメ
ㄎㄎ	ㄌㄌ	ㄊㄊ	ㄋㄋ
ハハノイエ		ミカキ	モモノキ
ㄎㄎ	ㄌㄌ	ㄇㄎ	ㄇㄎ

2. 2重音の場合

(A) 1点の加点を示す

イヨイヨ イロイロ シバシバ ソコソコ



チャクチャク トコトコ ノコノコ マテマテ



※ 上記符号では「イヨヨ」「イロロ」「シババ」「ソココ」「チャクク」「トココ」「ノココ」「マテテ」などと読みあやまることは殆どない。

(B) 楔形符号(「谷型」と「山型」)で示す

イヨイヨ イロイロ シバシバ ソコソコ



チャクチャク トコトコ ノコノコ マテマテ



※ 楔形符号は1辺の長さが約4ミリとして、特に角度については任意・自在とする。

3. 3重音, 3重音以上の場合

アトデアトデ ゲンキゲンキ コマルコマル



サラニ サラニ



スグニスグニ



ヌヌヌヌ



トテモトテモ



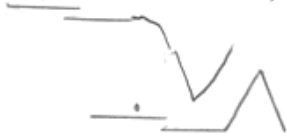
ナカイナカイ



ネムイネムイ



ガッカリガッカリ



ソレカラソレカラ



タイヘンタイヘン



ユックリユックリ



アツカイアツカイ



オチツイテオチツイテ



サヨウナラサヨウナラ



ダイジョウブダイジョウブ



マダシテモマダシテモ



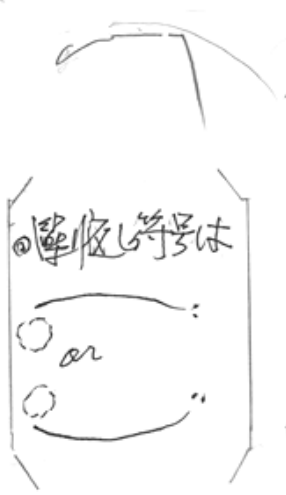
※ 音節の長さによって谷型、山型の辺の長さを適宜調節することも大切だが、子重音〜以上については、1辺の最短の長さが8ミリ〜10ミリ〜12ミリと、特に長さの枠を決めずにおく。本来、これらの隣り合し符号は、設えておくと若くはないのだが、どうしても必要な方法などは限らない。臨機応変的速記心態度で臨

む心構えが必要であろう。私ごとで恐縮であるが、私は敢えて使用せず、全言、順記おこととしている

4. 多重音節文の繰り返しの省略

※ 既にの重音、之重音、ヨ重音、等の省略要領を踏まえた上で、成語音節、或句音節の省略法を掲げる。

「冬がきました、冬がきましたけれども」



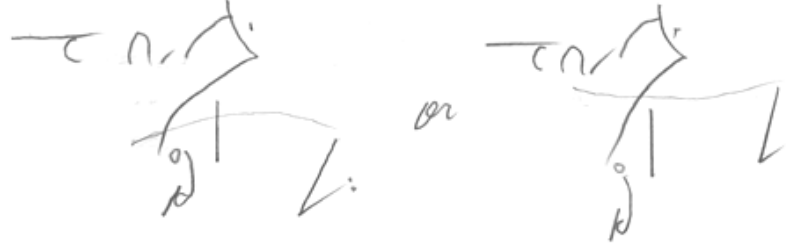
※ 過去文であるところより「ました」に形状の流れに頻りにして「」としたもの。
 「冬がきます、冬がきますので」は
 あいはい

要所に書き場、流れ線を遷換すること肝心要である。

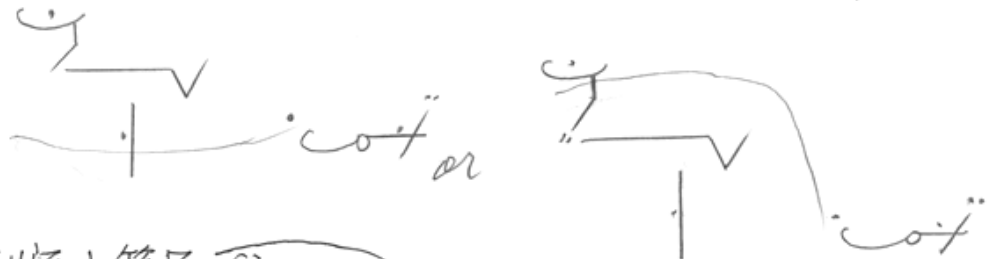
「大学は卒業した、大学は卒業したと言っても」



「彼は村の役場職に採用された。村の役場職に採用された途端」



「長々とした講演だった、長々とした講演だったが中身が良かった」



○ 繰り返し符号 ○
 文章の後半に於いて自由自在に変化することは屢々であるから、容易に妄りに乱用することは避けるべきである。
 ○には特別に規定された長さはない。

5. (1) 「3省4重」と応用

※ この省略法は特別に「省略符号」というものを設けない。呼称名(丸子式は「3省4重」としてある)こそ異なれ既存のあらゆる速記方式の以下に示す各種符号は、殆どが同一様式であり、省略符号はない。この省略法の応用は基本的には、所謂「4字熟語」を対象としており、速記際(符号)の減少にあることは言うまでもない。方法は3字目の漢文字符は書かずに省略し、1字目と2字目の連鎖された上に4字目の漢文字符を重ねるという書法である。

一蓮托生	画竜点睛	旧態依然	拒否反応	欣喜雀跃
權謀術教	高山植物	言語道斷	孤立無援	懇切丁寧
山川草木	贊否両論	自業自得	順風満帆	相撲部屋
相関係数	耐用年数	天真爛漫	年末年始	農林漁業
爆裂火口	疲勞困憊	貿易収支	满身創痍	門戸開放
優柔不断	郵便振替	用意周到	湾岸戦争	流汗淋漓

(ロ) 応用 (その1)

※「この応用」の項では、「3省4重」なる音節数、字数にのみ拘泥する必要は少しもないが、「3省4重」は書法の基本として弁えておけばよく、場合によっては、この枠を逸脱しても一向に構わないわけである。下記に掲げる決まり的的多重音節文などに対しても遠慮することなく大いに応用すべきである。但し、十分に博識たる素養事件が認めての上立つことは言をまたない。

ウェディングドレス オリンピックスタジアム ゴウタマシッタラタ

紅白歌合戦 ご多分に漏れず 小耳に挟んだ コミュニケーション

差し出がましい サブタイトル 猿の腰掛け 七味唐辛子


スタイリスト セーフティバント セルフコレクション センチメンタリズム

叩きのめす チェコスロバキヤ ディズニーランド 出たこ勝負

天然記念物 所変わば品変わる 生暖かい 濡れ衣を着せられる

ブエノスアイレス ベストコンディション ポピュラーソング

真平御院 横車を押す 喜び勇んで リオデジジェネイロ



(ハ) 応用 (その2) 成語成句の省略法

※ 6ページの「多重音節文の隣り返しの省略」にしても、本ページの72ページ～次ページの73～74ページの「成語成句(詠などの類)の省略符号」にしても、所謂「臨時文字……(佐竹式速記・学習コースIの213ページ)」とも称されるもの(サイン)である。特に、厳格な規定下において、組織的に確立された符号ではない。従って、書法については、極論をすれば「個人の認知的能力の有り丈を奮い起して立ち向かって頂ければ、如何なる形の符号を用いようとも、一向に構わないもの」と言ってもよい。丸子式速記符号では、余り難しく考えずに、単純に考えて、単に○印や——印を用いている。

「佐竹式速記・学習コースIの219ページの第8章の「応能省略法」の厳しい指荷を一読すれば、「速記を志す人は際限ない広範なあらゆる学問を身に備え、絶えざる、飽くなき集中心を傾注し、読解、速記に対処していかなければならない」と判る。また、その神髄についても力強く論され、次のように述べられている。

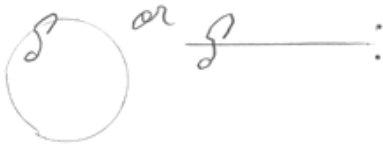
「応能とは能力に応じて、ということである。つまり、その人の能力に応じて深くも浅くも省略できる。という方法である。能力というのは知識と、決断力と、吐息の機転と、記憶力とを総合したものをここではい、そうした意味のことだ」とすると、認めても広くも浅くもなるということが言えるが、この応能省略法の場合は、省略法とは言っても、別に明確なものはなく、適宜に省略する1つの例を示すに過ぎないので、その能力ということが、ハッキリ問題になってくるわけである。たとえば「精神一到……」とくると、次に「何事も成らざらん」と言われなくても、それがわかっているという場合は、「精神一到」だけ書いて、あとは棒をひっはっておいでもいいわけであろう。ところが、ただなんでもかんでも、棒をひっはれば「いい」と思って棒をひっはっちゃったら、「何事も成らざらん」とあるとき、とたんにまじっしちゃう、ということでは困るので、そういう場合の臨機の処置方法の1つの例を示しておく、というのがこの応能省略法である。能力のある人はこれが相当有効に使えるのに反し、能力がないと、これがかえって害になることさえある。……(以下 略)」

※ 本 丸子式速記で掲げる「成語成句の省略法」では、何れかの中より、他の語類の中より、対象として取り上げ例示する。

頭隠して尻隠さず 当たらずと雖も遠からず



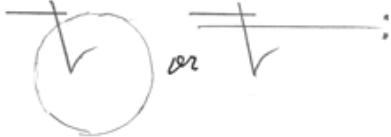
犬も歩けば棒に当たる



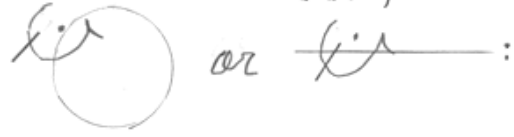
縁先で蜂は糞を待ち



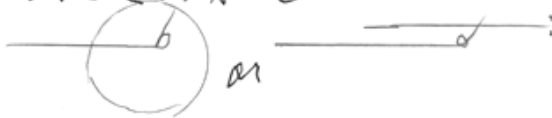
河童の川流れ



国破れて山河あり



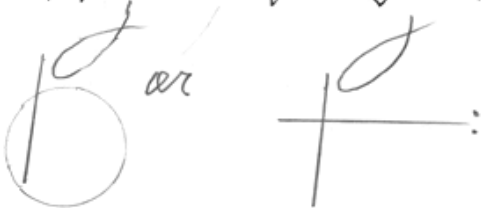
光陰矢の如し



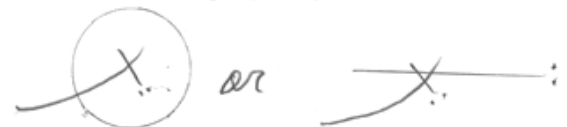
虎穴に入らずんば虎恩を得ず



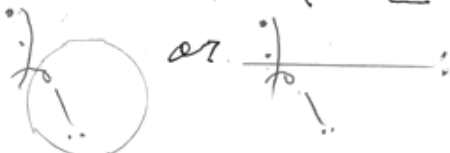
精神一到何事か成らざらん



損して得取れ



大山鳴動してネズミ一匹



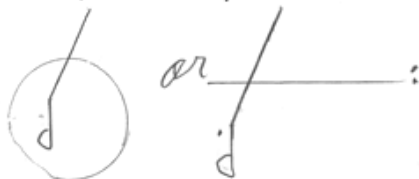
出る杭は打たれる



天網恢恢疎にして漏らさず

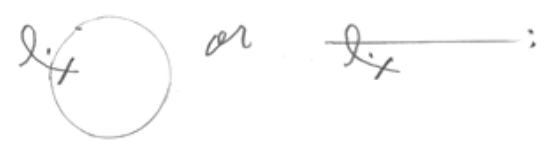
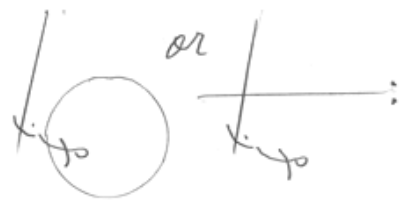


灯台下暗し



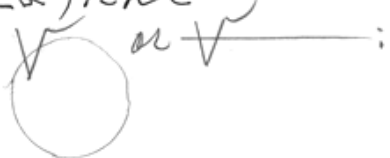
飛んで火に入る夏の虫

盗人を捕えてみれば我が子なり



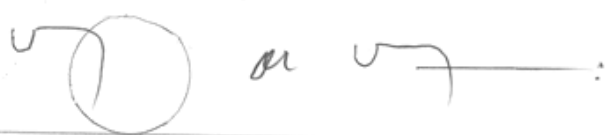
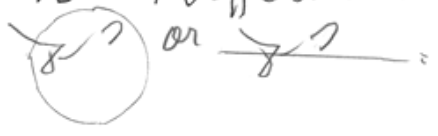
花よりだんご

他人の振り見て我が身を正せ



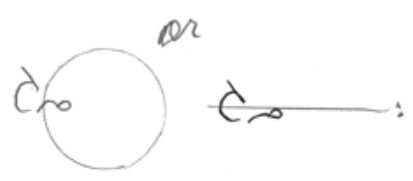
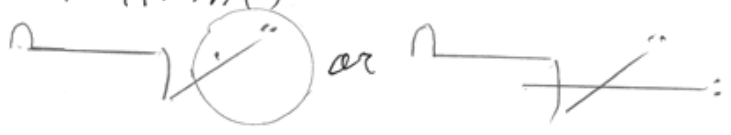
火を見るよりも明きらぬ

身から出た錆



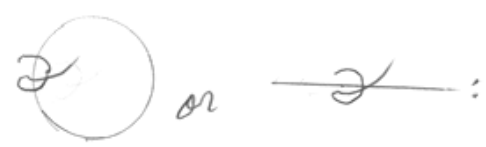
向こう三軒両隣り

弱目に崇り目



李下に冠を正さず

論より証拠



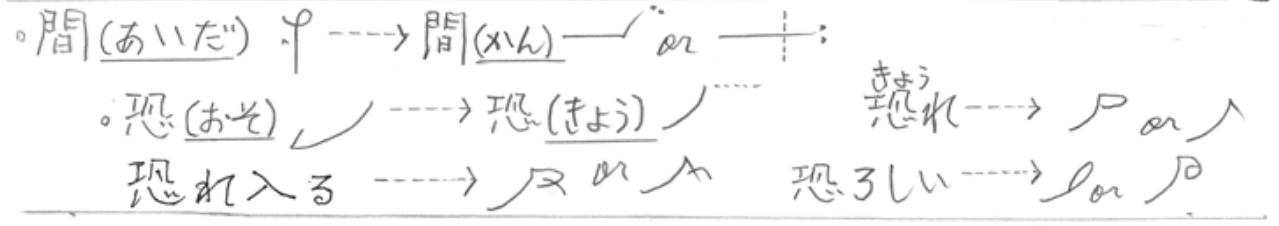
※ 言葉というものはアホージにいみじくも佐竹康平先生が述べられて
 いるように、変幻自在に際限もなく変化してゆき、変化が変化を生んで
 ゆき、行き着く果ても知らない。 ○印や ———— : 印は、極めて折
 り目正しい 発言者の模範的、典型的な形の中に於いてのみ 使用で
 き得るものである。 何をあいても「自在性」を先づ 念頭に置いて、
 ○印や ———— : 印は 飽くとも 基本的なものとして、更に多種にわ
 たる 類似人生的の符号を 創作してゆくことに如くはあるまい。 個々に
 於いて 考察された符号は 臨機応変として 窮余の一策として 咄嗟に
 突然に 使用されるべきものである。 併し、私は「符号」の乱造を
 妄りに 勧めたくはない。 それよりも、大切なのは「省略符号」の 極少を 備えておき、
 突如、突発的に 如何なる 話し言葉の 連発を受けたとしても 如何に 乱脈な 言い
 回しに 遭遇しようとも 毅然たる 態度を 堅持し 続け、 自然体で 微動だに せぬ 散
 たる 速記精神を 身に付け、 如何なる 言葉の 嵐に 遭遇しようとも 自在に 対処のできる

ネットワークの長く広い柔軟性を身に付けることが肝要である。
 何はともあれ、その速記精神醸成に先立つものとしての大要諦は、日頃より
 広範囲にして際限もない教養の深さ、広さを身に担しておくこと、この努
 力を片時も忘るべきではない、と力説したい。
 「省略符号」ばかりに凝り、身も心も汲々としていて、その依存性に嵌まり
 込むと、人間の脳は縦への面で横着になっていってしまう。私は、当該
 の類いの符号を、「横着符号」と、ひとり呼称している。
 速記人は常に学ぶことをストップせず、苦学を重ね、精一杯、力の
 限り、常に進の歩みを止めてはならないし、如何なる天変地異が襲
 いかろうとも、この努力を止めてしまってはなるまい、ことを力説したい。

訓読みでの符号を音読みでの符号に代替え

※ 漢字文字には、訓読みと音読みとがある。これを音節で表すと、当然、
 前者は、その漢字のもつ日本語本来の意味を説く為、当然、音節数は、後
 者より多い。この音節数に着目して、符号の省略化を図ろうという考え方である
 が、佐竹式速記・学習コース I」の 129ページには、「どんな語にもと
 んどん、この方法を使ってよい、というわけにはいかない。なぜなら、そんなこ
 とをしたら、例えば「音読みで、セイならセイ、スならスと読むの
 は、たくさんあり、いろいろに読めて、どれも本当なのか、わからな
 くなってしまふからである。」として、誰もかどびつきそうな、この省略法
 の安易性を、全面的、あるいは根底的に否定している。そして佐竹式
 では、その文字(符号)に限定されており、更に129ページには、「これ
 以外には使わない方がよい。これ以外には、他の省略法で充分、解
 決できるからでもある。」と、言い切っている。無闇やたらに浅薄な
 利便性のみを追求して有頂天になり、思わぬ危険な罠に嵌まり
 込まないよう、十分に注意することである。従って、この作符号は、極めて
 極めて限定的、且つ、固定的であらねばならないことが肝要で
 ある。丸子式速記符号で以下に例符号を掲げる。

ここで、肝心要のことを書き忘れたが、「訓読みでの符号を音読みでの
 符号に代替え」の場合に、符号を定着させる場所は「下段」とする
 ことを原則とする。序で乍らと言うと誠に失礼とはなるが、「佐竹式速
 記・学習コース I」の129ページの「三段法」の定義をその底、引用
 させて頂くと、「文を綴るときは、速記文字を左から右へ水平に並
 べて書くわけであるが、その水平線を中段として、それより少し上を上
 段、下を下段として特殊な省略の仕方をするのが、この三段法である。」



表(おもて) 々 → (ひょう) 表裏(おもてうら) → (ひょうり)

主(おも) 々 → (しゅ) 主に → (しゅに)

各(おの) 々 → (おの) 各々 → (おのづから)

除(おもむく) 々 → (おの) 除る → (おの)

数(かず) 々 → (かず) 数少ない → (かずが少)

確(たしか) 々 → (たしか) 確かに → (たしかに)

殿(どのどの) 々 → (どの) 殿方 → (どの)

後(のち) 々 → (のち) その後 → (のち)

遊(あそ) 々 → (あそ) 遊ぶ → (あそぶ)

急(いそ) 々 → (いそ) 急ぐ → (いそぐ)

疑(うたが) 々 → (うたが) 疑う → (うたがう)

選(えら) 々 → (えら) 選ぶ → (えらぶ)

踊(おど) 々 → (おど) 踊る → (おどる)

衰(おとろ) 々 → (おとろ) 衰える → (おとろえる)

兼(かね) 々 → (かね) 兼ねる → (かねる)